

## 最優秀賞

### 恨みを愛へ

下川町立下川中学校3年

みうら  
三浦 かな



「み・みず！水！」

まただ。また妹がうなされている。

5年前、末の妹が保育園の送迎バスに置き去りにされた。何人も大人の確認を怠り、妹はバスの中でだんだんと意識を失っていった。偶然早く迎えに来た母が気づいたことで、発見された。新聞に掲載されたのは「命に別条はない」の一文。しかし、別条がないというのは生きていくというだけで、今までの日常が戻ってくるわけではなかった。

あの日から、私達の生活は一変した。妹は事故のトラウマで夜中に泣き叫ぶようになった。ひとりでトイレに行けなくなった。村の安全対策に疑問を持ち、私たちは隣町に引っ越すことになった。

家族みんなが不安定になり、母から笑顔が消えた。妹は引っ越しのストレスで脱毛症になった。こうなったのは事故のせいだ、不注意な大人のせいだと、私は毎日事故を恨んだ。

私は当時まだ小学生だったが、何とかしたいと強く願った。苦しむ子どもが出ないように、壁新聞を作ったり作文を書いたりして社会に訴えかけた。しかし、当事者になるまでみんな他人事で、誰も耳を傾けてはくれなかった。

そんな時、私たちに転機が訪れた。自分の息子を保育中の川の事故で亡くされた方と知り合ったのだ。ライフジャケットさえ着ていれば防げた事故だった。その人は、二度と同じような事故が起こらないように子どもの安全を守るための活動、特にライフジャケット着用を呼びかける活動をしている。

会う前は、彼女も私と同じように社会を、事故を恨んでいるはずだと思っていた。しかし実際に会った彼女は、よく笑い、笑顔あふれる人だった。

失礼ながら私は「あなたは事故を恨んでいないのですか？」と聞いた。すると彼女はこう言った。

「もちろん、事故のことは憎い。だけど、その恨む気持ちは置いておいて子どもの命を守

ることを第一に活動している。」

笑顔を忘れずに、活動を自分自身が楽しむ。そうすると、自然と共感してくれる仲間が増えていくという。目の前にはいない誰かのために。

私はその姿に心動かされた。確かに、事故を恨んでいることを訴えても、そこから何も生まれません。置き去りにした人への恨みが増すだけで、誰もハッピーにはならない。

私達は、それまで抱いてきた事故や社会への恨みを、社会への愛に変えることにした。これ以上苦しむ人がいなくなることが、最大の願いであるということに気づいたからだ。

それから私達は、社会を巻き込んで活動していった。大好きな野生生物の命を守るため、この4年間家族で毎月ゴミを拾っている。水の事故を減らすため、2年かけてライフジャケットレンタルステーションを設置した。

髪がない辛さを知り、妹達と、3回目のヘアドネーションに挑戦中だ。目の前にはいない誰かと繋がっている気がする。こうやって小さいけれど、少しずつ楽しみながら社会を変えていこうと今も活動している。

私が住む下川町は昔、小学生が自転車事故で亡くなったことをきっかけにヘルメット着用を推進している。何十年も前の死が、そのまわりの人々の活動が、今の私たちの命を守っている。私たちは見ず知らずの誰かの愛に支えられて生きているのだ。

意識していなくても、私たちみんなが社会と繋がって、社会を作っている。安全な社会を作っていくのは、他でもない私たちひとりひとりだ。これからも、私は理不尽に誰かから傷つけられるかもしれない。でも、どんな辛いことがあっても恨みに心が占拠されないようにしたい。過去を憎むのではなく、周りへの愛に変えることで、未来はかならず変えられる。